

「ユビキタス時代の歩み方講座」第6回 2006/7月号

## 「時空を超える人と人のつながり」

速水 智子

<http://www.hayamizu.jp>

みなさま、こんにちは。

前回までは、「情報」についての様々な側面についてお話をしてきました。今回は、この時代ならではの「人と人のつながり」について考えてまいりましょう。

ユビキタス時代の特徴の一つとしては、コミュニケーションにかかる費用が限りなく安くなったことがあげられます。このことは「コミュニケーション革命」と言われるゆえんでもあります。昔に比べると簡単に、人と人が約束をすることが可能になった時代ともいえます。このように近年、広範な情報の交流は、至るところで人と人のつながりの妙味をもたらしています。人と人のつながりとしての“ネットワーク”がより重要な意味をもつ社会ともいえましょう。

### 強いつながりと弱いつながり

さて、人のネットワークには、相手とのかかわり方によって、“強いつながり”と“弱いつながり”といった関係があります。例えば親子、夫婦、親友のようにひんぱんに情報を交流させるような強い関係のものから、年に一度、会うか会わないかといった知人のように緩やかで弱いつながりの関係もあります。

この人間関係の強弱に着目した研究者マーク・グラノヴェッターは、1973年に“弱い絆の力”という論文を発表しました。この理論は、ふだんあまり会わない弱いつながりの人々のほうが強いつながりをもつ人々より、自分にとって思いがけない価値ある情報をもたらすというものでした。たとえば、人生の転機のチャンスを与えてくれたのは、意外にも、遠くの知人であったということは、誰でも経験していることではないでしょうか。

つまり弱い絆の人は、自分とはまったく異なる考えや自分とは縁の無い世界にいるからこそ、自分にとっては、おもいがけないきっかけやチャンスをもたらしてくれるというわけです。

ただし、これは強い絆の関係を否定するものではありません。自分を取り巻く濃密な人間関係があればこそ、人は気持ちの安定や日々の営みが行えるわけです。そんな心地よい環境の中から更なるチャンスをもたらし、実現不可能な展開や異質な世界との出会いといった機会としての“弱い絆の力”が重要なのです。

## 組織に属さない人たちのつながり

米国、特に西海岸では、組織に属さずに小さな起業を始めたり、テクノロジーを駆使して個人で仕事をしていくフリーエージェントと呼ばれている人たちが増えています。彼らは、独特な価値感のもと、人との結びつきを広げています。例えば知り合いから新しい仕事を紹介してもらっただけでなく、交流会や勉強会を通して悩みを打ち明けあったり、共創的な活動をしています。同じ会社の中の人たちが、教えたり教えられたりというものでなく、ゆるやかな絆の関係ながら生活や仕事で、互いにかかわりあっています。そして、その関係性は、常に流動的に変化しています。ハリウッドの映画作りなどにかかわる制作スタッフは、フリーエージェントとしての個人が集まりチームを組みます。映画が終われば、それぞれの履歴書に一行実績を書き込み、そして解散していくといわれています。

そこでは、情報を発信する（情報や貢献の多い）人は、網の目のように、次々と交流が開かれていきます。一方、情報を出すことを惜しみ、いつも得ばかりしようとする人は、それなりの評価がされてしまいます。ここでも「持ちつ持たれつ」の関係や信頼に足りうるべき相手かどうかといった側面が影響しています。

## 人と人のネットワークと情報の価値について

さて、人と人のネットワークと情報の価値についての関係では次のような説があります。

例えば、一人と多数の人がつながる「1対多」と言われるネットワークでは、人と人をつなぐ結線と言われる（結びつきの組み合わせ）はつながる多数の数に比例していきます。交換される情報の量は人数が増えるに従って、増加していきます。

次に多数と多数がつながる「多数対多数」では、人と人をつなぐ結びつきである結線は、つながる人数の二乗に比例します。たとえば3人と3人のグループ交流では、 $3 \times 3$ の9通りの情報交換が生まれるわけです。（ただし、互いに知り合いであるような場合）

つまり、このモデルの意味することは、互いの情報交流から、相乗的に新しい価値のある情報が生み出される可能性が高まる点が重要なのです。

また、ある人花子さんにつながっている人が10人いるとします。10人はそれぞれ、独立した、自分のグループを持っています。この時、花子さんから見ると、つながっている10人の人たちの、さらにその先にN人の人たちのネットワークを持つこととなります。つまり、花子さんにとっては、10人の二乗に比例した情報交流のチャンネルがあることになるのです。つながっている人たちが互いに知り合いでは無い場合では、初めて会う人たちとの新鮮な交流によって、新しい情報に出会う可能性が飛躍的に高まることとなります。

## 世界の狭さを実証しよう・・スモールワールドプロジェクト

人のつながりについて、面白い実験がありますのでご紹介いたしましょう。

約40年前にスタンレー・ミルグラムという研究者が、米国内の離れた二つの地域から無

差別に一人ずつ選び、片方の人を始まりとして、もう一人のターゲットに行き着くように、到達できそうな知人に手紙を送るという実験を行いました。ターゲットの人に手紙が届いた場合には、最初の人の子人、知人の知人、知人の知人の知人のようなつながりで数えて、約6ステップでたどり着いたということです。

これは、人とのかかわりというものは、案外スモールワールド（小さな世界）であることを私たちに示してくれます。現在ではコロンビア大学の「小さなプロジェクト」としてインターネットによって電子的な実験が行われています。

今日見られる高域な情報交流空間においては、その広がりとスピード感は、国境をも超え、いっそう加速されると思われます。益々小さな世界へと向っているのかもしれない。



### ソーシャル・キャピタルについて

さて、人と人のつながりによって生まれる社会的なネットワークでは、互いに助けあう関係や信頼関係の規範の程度について“ソーシャル・キャピタル”という言葉で表しています。日本では、社会関係資本と言われます。社会的ネットワークを一つの資源ととらえる考えに基づいています。簡単に言うと、グループや団体、組織を効果的に動かす、人間関係の“結集された力”ともいえます。

例えば、そのグループのチームワークのおかげでスポーツやイベントなどが成功を収めたとき、“ソーシャル・キャピタル”が高いグループと言います。

高いレベルのソーシャル・キャピタルを持つ組織では一人ひとりが参画意識が高く、協力関係や忠誠心、献身などの特徴が見られます。

ソーシャル・キャピタルの高い社会では、経済効率が高く、信頼に満ちた社会になるともいわれています。

### 異質な出会いが何かをもたらす

さて、ユビキタス社会では、これまで以上に“信頼”ということが重要となります。信頼関係に裏付けられたネットワークでは、互恵的な関係が生まれやすいといわれています。人とのかかわりにおいて、互いに信じあえる関係を作りあげたいと願うのは誰でも共通なことだと思えます。

そのために、ちょっとふりかえって、自分のネットワークを意識してみることも大切なことではないでしょうか。遠くにいる知人との縁を補強したり、世代や趣味が異なる人とのふれあいを持つことによって、新鮮な発見があるかもしれません。

真のユビキタス社会というものは、時間と距離をも超え、共鳴する心と心をつなぐために、この世にもたらされたものでなくてはならないと最近、強く思うところです。

2006/07